

講演会

揖斐川町ゆかりの 春日局と父白樺城主斎藤利三の事

講演内容

- ① 春日局と父斎藤利三
- ② 局の前夫稻葉正成
- ③ 正成の祖父稻葉一鉄
- ④ 正成の旧主小早川秀秋
- ⑤ 局と正成夫婦居候先改田伝右衛門
- ⑥ 野中兼山と山内一豊
- ⑦ 利三居城丹波黒井城
- ⑧ 斎藤氏と稻葉氏系図（東京大学史料編纂所蔵）



【講 師】田 中 豊 氏（揖斐川歴史民俗資料館 古文書講師）

【日 時】令和4年1月16日（日） 14時00分～
(開場 13時30分～)

【会 場】揖斐川町地域交流センターはなもも 大ホール

【定 員】200名

(令和4年1月12日（水）午前9時より電話受付
定員になり次第締め切らせていただきます)

【参 加 費】300円（資料代）

【お申込み】揖斐川歴史民俗資料館

0585-22-5373

揖斐川歴史民俗資料館

501-0603 岐阜県揖斐郡揖斐川町上南方 901-5

TEL 0585-22-5373

開館時間 午前9時～午後5時

休館日 毎週月曜日

主催：揖斐川町教育委員会 社会教育課



※新型コロナウイルス感染予防・拡大防止のため会期の変更がある場合があります

次

目

- 一 指斐川町は歴史の宝庫 一
- 二 春日局と父斎藤利三 二
- 三 局の前夫稻葉正成 八
- 四 正成祖父稻葉一鉄 八
- 五 一鉄嫡孫豊後臼杵城主稻葉一通 五
- 六 正成旧主小早川秀秋 六
- 七 正成・阿福夫妻居候宅改田伝右衛門尉 八
- 八 土佐藩祖山内一豊 八
- 九 指斐川町から土佐へ 二六
- 十 斎藤利三居城丹波国黒井城 二七

一 捩斐川町は歴史の宝庫

揖斐川町は山紫水明に恵まれ、町内随所に史跡が点在する歴史の宝庫である。ここで取り上げる『春日局と父斎藤利三』についても、両人の生誕地として著名である。

春日局は三代将軍徳川家光の乳母となり、大奥を統率し、その影響は将軍家光をはじめ老中、諸大名に及んだ。二代将軍秀忠の孫の明正天皇践祚にも尽力した。局の縁者で幕府に登用された人物は多く、前夫稻葉正成は大名に、その子正勝は老中に、中でも娘婿の堀田正吉の嫡子正盛は家光側近隨一の重臣となる。

局の父揖斐川町の白樺城主斎藤利三は、明智光秀の重臣として、光秀の丹波攻略に活躍し、天正七（一五七九）年八月、難攻不落の兵庫県丹波市黒井城を落とし、城主となる。同十年六月の『本能寺の変』で采配を振るい、主君光秀、徳川家康、細川藤孝らに加わり、公家勧修寺晴豊の日記『日々記』に『信長討ちの談合衆なり』との記述が見られる。山崎の合戦に敗れ大津市堅田で捕えられ、洛中引き回しの上磔刑となり、骸は光秀と共に晒された。

局の前夫稻葉正成は、揖斐川町の清水城を築いた西美濃三人衆の一人、稻葉一鉄の孫にあたり、揖斐川町の住人。筑前国にわたつて名嶋城主小早川秀秋に家老として仕える。関ヶ原の合戦の折りの秀秋の東軍方への寝返りに功があった。翌年、正成夫妻は美濃に帰り武芸川町谷口の改田伝右衛門尉宅に居候。隣接斎藤利国正室一条兼良の娘利貞尼開山法泉寺の山門は、NHK大河ドラマ『春日局』のタイトル画に見られた。

また、一鉄の嫡孫豊後国臼杵城主稻葉一通の正室は、明智光秀の娘ガラシャの次女多良である。土佐藩祖山内一豊も又、揖斐川町ゆかりの人である。一豊の妹合は揖斐川町の野中家に嫁して土佐にわたる。一豊の弟康豊の娘は、正成の後妻となる。一豊の姉通は、西美濃三人衆の一人北方城主安藤守就の末弟郷氏の正室。郷氏の姉は改田伝右衛門尉の正室。

このようにして、揖斐川町を舞台に、さまざまな歴史が繰り広げられたのである。

二 春日局と父斎藤利三

春日局

徳川三代将軍家光の乳母。お福ともいう。天正七（一五七九）年に生まれる。父は明智光秀の重臣斎藤利三、母は稻葉通明女。父利三が山崎の合戦で自刃（一説に磔刑）ののち、母方の一族稻葉重通の養女となり、その養子正成に嫁し、四男（正勝・正定・岩松・正利）を生む。のち、正成と離別して大奥に仕え、慶長九（一六〇四）年、家光誕生に伴い、その乳母となる。後年、家光が將軍職に就任できたのは、局の働きによるところが大きい。すなわち、幼少時の家光は父の將軍秀忠、母の御台所浅井氏（お江与、崇源院）にうとまれ、世嗣の座（次期將軍の座）は弟忠長に移る気配であった。それを察知した局は、元和元（一六一五）年、ひそかに駿府に至り、この旨を大御所家康に訴えた。その結果、家康の取り計らいによつて、家光は世嗣の座につくことができたのである。寛永三（一六二六）年、浅井氏の没してのち、局は大奥を統率し、局の元で諸々の『撻』などが制定されたという。また、大名証人のうち、女子のことはすべて局一人で沙汰をしたといわれる。その影響力は將軍家光をはじめ、老中・諸大名など幕府の内外に及んだ。

同六年、いわゆる紫衣事件が起こり、後水尾天皇が讓位の意志を示すさ中、局は大御所秀忠の内意を受けて上洛した。このとき幕府の一侍女の身分にして、武家伝奏三条西実条の猶妹に定められ、『春日の局』号を賜り、参内を許されて、天盃を授かった。これは公家衆に希代の儀との批評をうけたのである。この直後、天皇は興子内親王（明正天皇）に譲位してしまった。同八年、近江佐和山（彦根）に至り、井伊直孝に密旨を伝える。

ところで、局との縁故で幕府に登用されたものは多い。夫正成は大名に取り立てられ、子正勝は老中に出世し、兄宗利・三存、女婿堀田正吉は旗本の士に召し出された。なかでも正吉の子正盛は老中に経て家光側近隨一の重臣にまでなった。

また、局は旧主明智光秀の女お玉（ガラシャ）の嫁した細川忠興家と親密であった。寛永元年、江戸湯島に天沢寺（のち麟祥院と改む）を建立し、同十一年、子正勝没後、麟祥院と称し、また、京都妙心寺の塔頭に麟祥院を建立した。代官町・春日町に屋敷を賜り、采地三千石を領した。豪侠の性質であったという。寛永二十年九月十四日没す。六十五歳。

湯島天沢寺に葬る。法名は麟祥院殿仁淵了義。

父 斎藤利三

戦国・安土桃山時代の美濃出身の武将。内蔵助。『美濃国諸家系譜』には天文七（一五三八）年生まれとあるが、『寛永諸家系図伝』によれば、天正十（一五八二）年四十九歳で没すとあるので、天文三年生まれとなる。父は『寛永諸家系図伝』によれば伊豆守某とあり、『美濃国諸家系譜』には伊豆守利賢とある。母にしても明智光秀の妹とするもの、親順の女とするものなど諸説がある。また妻についても稻葉良通（一鉄）の女とするもの、姪とするものなどあり、その生い立ちについては未詳である。

はじめ斎藤義龍に仕え、ついで一鉄に属したが、やがて織田信長に仕えた。天正八年、光秀に迎えられて、一万石を与えて丹波に居した。天正十年六月二日、光秀が信長を京都本能寺に襲撃するや、これに参加し、山崎の戦にも従軍したが、戦いに敗れ近江堅田に逃げて捕らえられた。同月十七日、京都六条河原で斬られ、その首級は光秀の首級とともに本能寺に晒され、さらにその屍は光秀とともに栗田口で磔にされた。

このとき利三は四十五歳（または四十九歳）。遺骸は京都真如堂の東陽院に葬る。

【国史大辞典】

斎藤一流抜粹

斎藤内蔵助

利二

宗善之女也。但光秀の叔母也。

室ハ稻葉右京亮通勝之女也。通勝ハ伊豫入道

一鉄（鉄）之兄弟。始ハ利三、斎藤右兵衛大夫龍興（仕、後、

暫、稻葉伊豫守二被扶助。天正八年（一五六〇）庚辰（月）從、

明智日向守光秀（に）仕。丹州（曉宇）郡猪口山（に）て、□□「石」（を）領。

無双之英勇也。

天正十年壬午六月廿日、京都日之岡（に）て、被誅（てちゅうせらる）。年四十五。

利次

斎藤大八郎

二十八才

女子

長曾我部土佐守泰元（親室）

母ハ稻葉右京亮通勝女。

或、三好

二孝

斎藤與三右衛門 助左衛門

父滅後、加藤清正仕。朝鮮國於、武功有。其後、秀忠公ニ被召出、五千石^を賜。子孫繁昌入。

二友

斎藤長津守 領五千石

承應三年甲午(一六四四)十月廿日死。年四十一。

二賢

斎藤美作守 五千石

綱吉公御小性 本所猿江

利成

斎藤平三郎 徒五位下
伊豆守 立本

童名、於出來。明智平三郎^と号。永祿十一年戊辰

二月生。母ハ稻葉通勝女也。明智日向守光

秀仕、伊豆守^と任。年十三、名譽之勇士也。主君并^{ならびに}

父死後、大撫付^と成。斎藤立本^と号。加藤清正^に仕、
二万石^を賜。後、又、伊豆守^と改。慶長之末、徳
河家被召出、五千石^を賜。蓋^{けだし}妹之縁^に依也。
松平伊豆守信綱執權^の時、佐渡守^に改。

慶安三年庚寅(一六五〇)八月十三日死。年八十三。

利重

斎藤角右衛門

筑前國主小早川中納言金吾秀秋^(往) 五百石^を領。

慶長六年辛丑三月、筑前國ヲ立退、浪人ス。

朋友稻葉佐渡守正成、堀田勘右衛門正利ト俱ニ、三人
同時ニ、筑前ヲ立退ク。

女子

稻葉内匠助正成室

阿福之方 春日局ト云。
三代將軍家光公御乳母

天正五年丁丑、濃州ニテ生。母ハ同上。慶長元年之
頃、稻葉正成嫁。稻葉美濃守正勝、堀田加賀守

正俊等之母也。慶長九年甲辰七月、家光公御誕

生二付、御乳母とす為これにし之こうし仕候こうし、春日局ヒマツシキ号ごう。城中御

局頭と成な。寛永二年乙丑(エトウ)二月、江戸本郷に於て

天澤寺あまざわじ建立たて。

一本二寛永十一年甲戌九月十四日、逝去。

法名麟祥院殿

正保三年四月十四日死共、云々。

春日局、後二三千石化粧田を給ひ、寛永二年、菩提寺ぼだいじを相願あい、江戸本郷に於て天澤寺あまざわじを建立たて。春はる開山ハ京都妙心寺みょうじんじの謂いわゆる川列和尚也。將軍家より天澤寺あまざわじ江油料えのりりょう為とす、三百石御寄みよよせ附也。

【田中豊編『東京大学史料編纂所蔵美濃国諸家系譜』】

三局の前夫稻葉正成

林市助。初めは、左衛門ともいう。初めて稻葉内匠助と号す。稻葉佐渡守。始め濃州石津郡高須城に住す。永祿七甲子(一五六四)年、清水（揖斐川町）において生まれる。母は稻葉伊予守良通入道一鉄斎女なり。始めは稻葉一鉄斎に仕え、清水に住む。兄政基死後、その妻再び正成に嫁す。その後、くだんの妻病死す。

よつて、正成、再び斎藤内蔵助利三の女を迎へ、以て妻とす。阿福の方とのたまわく。後、徳川家光公の御乳母となりて、春日の局という、これなり。天正十六戊子(一五八八)年冬、一鉄斎死後、正成は西国に赴き、筑前国名嶋城主小早川左衛門督隆景、金吾中納言秀秋父子に仕える。慶長五庚子(一六〇〇)年九月、関ヶ原の合戦の時、志を徳川家と通ず。これにより、小早川秀秋、東軍方に寝返る。

【田中豊編『東京大学史料編纂所蔵美濃国諸家系譜』越智姓稻葉氏家譜抜粹】

四 正成祖父稻葉一鉄

戦国・安土桃山時代の美濃国の武将。美濃三人衆の一人。姓は越智氏で、幼名を彦六といい（六郎とする説もある）、名を通以・通朝・貞通・長通・良通と幾度も改めている。右京亮、伊予守を称し、入道して、一鉄と号した。通則の末子で、はじめ長良（岐阜市）の崇福寺に入り僧となつた。大永五(一五二五)年、近江の浅井氏が美濃に進攻してきたとき、これと戦つた通則と五人の兄が石津郡牧田（大垣市上石津町）で討死したので、還俗して家をつぎ土岐頼芸に仕えた。

土岐氏滅亡後は斎藤氏に仕え、氏家常陸守・安藤伊賀守とともに美濃三人衆と呼ばれた。永禄十(一五六七)年、織田信長の美濃攻略に際し、氏家・安藤と謀ってこれに内通し、姉稻葉山城落城の足掛かりをつくった。以後信長に仕え、美濃曾根城(大垣市)を居城とし、姉稻川の戦をはじめとする浅井・朝倉氏との合戦に功を立て、のち美濃清水(揖斐川町)に移つた。信長と安藤伊賀守が反目するに及び、一鉄は兵を出して安藤氏を滅ぼした。天正十(一五八二)年、信長が殺害されると、羽柴秀吉に仕えたが、本能寺の変後、急ぎ美濃に帰り、国内の諸寺社に制札を出したため秀吉の不審をかつたという。同十二年、小牧・長久手の戦には秀吉方にあつて奮闘し秀吉が閑白を挙げるに及び、一鉄は三位法印に叙せられたといふ。家譜などによると、一鉄は武勇とともに文才もあり、あるとき、信長に疑いをかけられ、茶室で殺害されそうになつたが、一鉄は床にかけられてある虎堂の墨蹟を解読しながら自己の無実を述べたので、信長は感心して、その疑いを解いたといわれる。天正十六年十一月十九日、美濃清水城にて没。同国大野郡長良(揖斐川町)月桂院に葬る。

法号、清水院一鉄宗勢。長子は貞通、次子は重通、他に直政・方通らの子息がいる。

【国史大辞典】



稻葉一鉄画像



月桂院の一鉄墓碑



一鉄築城清水城址

越智姓稻葉氏家譜 抜粹

通豊

同四郎兵衛 内匠

父兄同時同所於討死。十九才。

通廣

同又五郎 兵庫

父兄同時同所於戰死。六男也。

本名通朝 始出家 後還俗

稻葉彦六郎 伊豫守 入道一哲齋
從五位下

永正十四年丁丑(一五六七)生。母者一色左京大夫義遠女也。始者厚見郡岐阜長良之神護山崇福寺二入

て出家し、崇福寺唱食宗哲^{とす}号。天文二年巳(一五六三)八月十一日、父兄六人悉ク牧田之合戦^{とさ}討死。于時、唱食年十七歳なり。其母、是を呼寄、翠帳之座を

下り自ら粥を煮、士卒を集、今日与^よリ此唱食を以^{もつて}大将と^し、各忠功を可^{つくべし}云々。皆領掌^{りょうしよう}而、此唱

食を守立、軍将とし即出陣而、合戦勝利を得、父兄ら讃嘆を報し、然而還俗し、稻葉彦六郎通朝と号し、後、良通改土岐、斎藤之両代仕、美濃国四人衆と称。伊豫守、安八郡曾根城に住。弘治二年丙辰(十五年)四月、斎藤道三攻討、同三年丁巳三月、大野郡清水城攻取。永祿七年甲子(十六年)八月与り、織田信長仕。正九年辛巳(十六年)正月元日、主家の連枝大野郡揖斐城主揖斐周防守光龍を攻口し、後入道而、一鉄斎号。其後、天正十一年未七月、郷渡之城攻取畢。天正十六年戊子十一月十九日、清水於死。

七十二歳。或ハ八十二。

法名清光院殿前豫州大守三州法印

一鉄宗勢大居士

女子 土岐一色宮内少輔頼榮(業)室
土岐織部正昭頼母也。

或ハ通政 林七郎右衛門 宗兵衛
政二

天文二年癸巳九月、本巣郡十七條城に生。母ハ稻葉隼人佐通俊女奈り。室ハ稻葉伊豫守良通入道一鉄の女也。一説ニ政三、事実ハ林駿河守通政入道之次男也と云々。正長嫡子長政、天文十一年壬寅九月三日、武田晴信、乱入而、夜合戦の時、討死す。依て、甥政三養、家嫡と為云々。土岐頼藝之六男頼昌之乳口也。天文十一年壬寅九月、十七条城焼落之後、暫厚見郡西之庄に住。其後又、十七条帰住。父死去之後より厚見郡江崎村耳移住。大守土岐頼藝之六男、江崎六郎蔵人頼昌を後見す。天正十年壬午二月、舅稻葉良通之命依、江崎頼昌相伴上総国夷隅郡満(満)喜に趣、土岐頼藝入道宗藝を呼迎、濃州帰。然后、頼昌同道而、大野郡清水城趣。稻葉良通仕、国役勤、算術之達人也。同十六年戊子十一月、稻葉一鉄死去之後より徳川家被召出、高須之城に住。慶長六年辛丑四月三日死。年六十九。

一本二ハ 天正六年戊寅四月三日、死春と、云

々。是併しかしながら 誤り奈るべし。既ニ天正十年壬午ニ

月、江崎六郎頼昌を同道じて而、上総国ニ趣きた
る事者は実正奈り。又、同十一年未夏、井戸十郎
可郷戸城を攻取て、一鉄より政三じニ命じして、
是を守らせたり。或ハ又、政三ハ後ハニ筑前国
ニ移りて、小早川中納言秀秋ニ仕はと、云々。是
又、誤り也。小早川ニ仕官せし者は、嫡子正成。事
奈り。

政三法名寛月宗本大禪定門

石塔ハ厚見郡西之庄立政寺ニあり。

鯰江左近大夫高景室

此傳不審也。鯰江ハ江州住人也。一本二曰、本
巣郡生津住人祖父江左衛門室歟。

女子 石河駿河守源光清室

女子 堀田孫左衛門正種室

政基 林新助 或ハ新九郎

永祿五壬戌年(一五六二)美濃國厚見郡於にて生。母ハ稻葉

伊豫守良通入道一鉄斎女也。室ハ稻葉兵庫

頭重通女也。稻葉一鉄斎仕は、大野郡清水にて住。

天正十年壬午五月五日死。二十歳。

ハ左衛門共いふ。

林市助初て稻葉内匠助と号。

稻葉佐渡守

始濃州石津郡高須城ニ住春。

正成

永祿七甲子年清水にて生。母ハ同上。始者稻
葉一鉄斎仕は、清水にて住。兄政基死後、其妻、再ふたび正成嫁。
其後、件くだん之妻病死春。依て、正成、再、斎藤内蔵
助利三の之女を迎、以テ妻とす為。阿福とのまわ之方田。后ち、徳川
家光公之御乳母と成て、春日之局と云、是也。

天正十六年戊子冬、一鉄斎死後、正成ハ西

國趣、筑前国名嶋城主小早川左衛門督隆景、

金吾中納言秀秋父子仕。慶長五年庚子(一六〇〇)九月、関
ヶ原合戦之時、志を徳河家と通春。

五 一 鉄嫡孫豊後白杵城主稻葉 一通

正室は、明智光秀の娘ガラシャの次女多良。多良は、光秀の実家、ガラシャ生誕地の大垣市上石津多良の地名に由来するか。

女子

多羅、多良。

稻葉民部少輔一通姓ハ(豊後白杵城主)室、

越智

天正十六年戊子生ル、慶長十九年甲寅九月十七日豊後白杵ニ卒ス、年二十七。

法号徳雲院玉叢英蘭、豊後月桂寺ニ葬ル。

母 同上、

稻葉良通

本名、通朝。

貞通

入道して一鉄。

安八郡曾根城に住。

大野郡揖斐城に移住。

安八郡曾根城主。

天正十八年、郡上郡

菩提寺、揖斐川町、

八幡城主。二万五千石。

月桂院。

慶長五年、豊後白杵城主、五万石。

母

日不詳

慶長三年戊午日大、

月桂院。

慶長五年、豊後白杵城主、五万石。

母 明智次右衛門光忠之女、小ヤ、

六 正成旧主 小早川秀秋

天正十(一五八二)年、慶長七(一六〇二)年。織豊期の武将。通称金吾中納言。父は豊臣秀吉の正室高台院(北政所)の兄木下家定。秀吉の養子となつて、羽柴秀俊と名乗り、丹波龜山十万石を領す。文禄二(一五九三)年、小早川隆景の養子となり、その旧領をつぎ、筑前名嶋城主となる。

慶長の役に総大将となつたが、その挙動をとがめられ、慶長三年、越前北ノ庄十二万石に減封。翌年、筑前・筑後の旧領に移された。関ヶ原の合戦で東軍に内応した功により、備前岡山五十万石を与えられたが、嗣子なく家は断絶した。

【新版角川日本史辞典】

【熊本市総務課歴史文書資料室提供】

仕織田信長
筑阿弥

秀吉

初、日吉、木下藤吉郎。羽柴筑前守。
実ハ、中村弥右衛門昌吉ノ子。

女子

尾張国海部郡乙子村弥助妻。弥助、実ハ、昌吉子弥助。後、三好武藏守。
入道シテ、三位法印一路。其子、秀次・秀俊。

小名、小筑。後、大和大納言。

秀吉異父弟也。

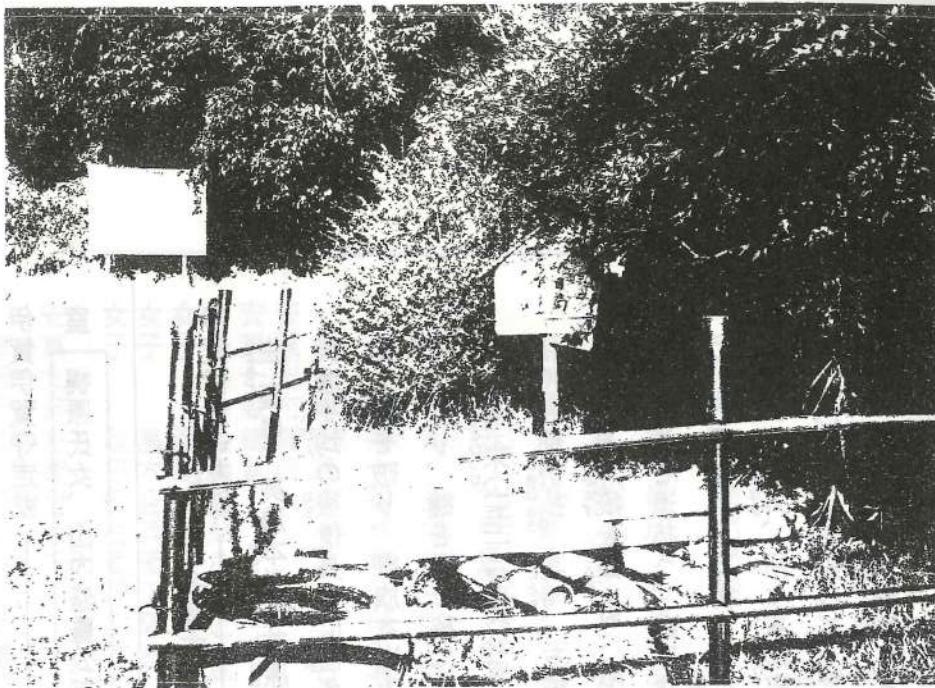
秀俊 大和大納言。実ハ、三位法印一路子。

女子

号朝日。東照神君(家康)大夫人、南明院。

お中
父持
保廉
萩中納言

お中
筑阿弥



七 正成・阿福夫妻居候宅
改田伝右衛門尉屋敷跡

十四 改田伝右衛門尉屋敷跡

武儀郡武芸川町谷口

【史跡春日局お屋敷跡由緒】

関ヶ原合戦の時、春日局の夫稻葉正成は豊臣秀吉の直臣となり、文禄の役（一五九二年）のあと、小早川秀秋の家臣となつた正成は、政治的、軍事的手腕は相当なものであつたらしく、小早川家では五万石を受け、関ヶ原合戦では、秀秋の東軍の寝返りに力があつたといわれるが、政道についてたびたび秀秋に諫言したが、聞きいれなかつたため、慶長六年（一六〇一年）夫正成は、春日局と子供を連れて弟の改田孫六清常（改田伝右衛門尉のこと、郷氏姉婿）の住む、美濃国『谷口の里』に閑居した。春日局にとっては、遠祖父の斎藤利永の創建した汾陽寺と春日局の大祖母にあたる加納城主斎藤利國の妻利貞尼『細姫』の開基とする法泉寺があり、春日局にとてもゆかりの深い『谷口の里』であった。

後略

【田中豊編『山内一豊公ゆかりの美濃を訪ねて』】

秀勝	実ハ、織田信長男。秀吉、義子（養子）トス。小名（幼名）、次丸。後、丹波守十二万石、叙從四位。仕羽柴丹波守。天正九（一五六）年、甲州府中城ニ転封、文禄年中、朝鮮病卒。
秀次	実ハ、三位法印子。初、三好山城守康長、義子トス。号三好孫七、称治兵衛。後、秀吉義子トス。関白、従一位。
秀康	実ハ、神君（家康）二男。小名、竹千代。秀吉、義子トス。仕羽柴三河守。後、結城婿トス。任越前中納言。是、越前ノ祖也。
秀秋	実ハ、木下肥後守家定（政所の兄）男。政所（秀吉正室）子無ニ依リ、義子トス。後、小早川隆景ノ義子。左衛門督。筑前中納言。
棄君	八幡太郎、早世。
秀頼	小名、拾君コト拾松。
母ハ、浅井備前守長政女（淀君）。	
国松	女子 鎌倉東慶寺天秀。

【田中豊編『丹羽玄塘著尾張塘叢』太閤真顕記】

中女藤母・賀・守・定就一族系図

伊賀伊賀守定就

伊賀伊賀守定重

室 梶原氏女、山内盛豊公御室之姉姫ト云。

室 稲葉兵庫頭重通女

伊賀伊賀守友郷 幼名藤太郎 出羽守 左衛門佐 守就(入道して道足)

生國は、美濃本巣郡芝原の北方七間の城主、累代住居す。土岐、斎藤両家に隨從、織田信長公美濃平均の後信長公に仕える。元亀元庚午年(一五六〇)江州姉川御合戦の時浅井備前守、信長公の先手を破り、御旗本進み来る時、氏家ト全、友郷、信長公の命を受け相戦い、強勢稻葉伊予守を破り、鎗を入れ終に追い崩す。この軍功により御感状、御腰物、御馬拝領す。

同一辛未(一五〇一)信長公尾州長島発向、所々に放火、美濃国多芸口の諸勢引取べく、命により

諸将翌朝引払。其時、友郷二番の殿勤の時、

「起(一揆)

蜂起

稲敷

、友郷付裏

う士卒を励まし

敵の残党を追払う。數度防戦すと雖、数所手負、其上向歯突折られ、鋒先喉脇へ出、進退途を失

う。五男七郎、友郷を肩に懸け引退く。郷氏家来、玉田惣右衛門、敵の馬を奪い抱乗て引き退

くと云。此外、所々軍勅有りと雖、不詳。

天正八庚申年(一五六〇)友郷、郷氏俱に信長公の疑念を受け旧城の地を離れ武儀(武芸川町谷口)へ蟄居。雖然、憤怒散らざる稻葉伊予、守義通討手を差向られ、同九辛巳年六月十日戦死。美濃奥村(岐阜市奥)龍峰寺に碑有り、前伊州大守東岸道足居士、右手禪僅寺に位牌有り。

室 蒲生右兵衛太夫賢秀(日野城主、嫡子氏郷会津城主)女

法名珠琳定尼

天正九辛巳(一五六一)六月八日戦死

右同戦死 友郷養子、右同戦死

安東平左衛門郷良 右同戦死

安東右衛門郷利

安東基左衛門郷春

安東太左衛門守吉

安東次郎左衛門定郷

安東半十郎賢郷

安東七郎守重

安東次郎左衛門定郷

安東三右衛門郷純

安東源次郷忠 始め蒲生源次

元龜元庚午(一五七〇)一月美濃北方に生る。始め郷氏男子無く養子とす。其後可氏生れ、故に兄

蒲生賢秀養子とす。天正九辛巳(一五六一)六月七日城攻の時、通姫君(一豊姫)、可氏、郷忠三人

落去、竹中重治の家に隠れる。天正十三乙酉年(一五八五)一豊公江州長浜御入城の節、通姫君、

可氏、美濃岩手(垂井町)より御迎え取り御養育、其後郷忠召寄られ、理髪の時、一豊公より御

脳指一腰拵領、御入國の後、知行三百石拵領与力仰せ付られ有故、旧臣前野助太夫百石分地。

慶安四辛卯(一五九一)七月一日卒。法名天岳院道精。

安東出市頼郷

安東十歳郷重

女子 金森五郎八長近(高山城主)室

女子 西尾豊後守光教(曾根城主)室

女子 島木金兵衛正陳室

女子 改田伝右衛門尉室

幼名 松之助 藤太郎

伝右衛門尉宅、稻葉正成・阿福(後の春昌)夫妻居候宅。武芸川町谷口、法泉寺に伝右衛門尉の墓碑、西隣りに居宅跡。

享禄元戊子(一五二八)美濃北方に生る。母稻葉氏。始め織田信長公に仕え軍功有。

天正九辛巳(一五六一)六月十日七間城攻めの時、千代母瀬(本巣郡北方町)に於いて戦死。

享年五十八。法名徳涼院正安(墓所、岐阜市奥龍峰寺)

室山内盛豐公御長女通姫後北方殿と唱る。

天文二癸巳(一五三三)御出生、同十四乙巳(一五四四)尾張黒田より美濃北方御弓越し御婚禮。慶長六年辛丑年(一六〇一)一豊公御入国の節、土佐へ御越、可氏宿毛城地引き移しの後、迎え取之。

慶長十丙午(一六〇五)十一月十五日卒。享年七十四。

法名法雲院殿妙栄日通、法雲山妙栄寺を建て、墓寺中に在。

安東源吾 毛利河内守養子 後參次

安東次左衛門

安東長次郎 早世断絶。

江州長浜、一豊公に召出され、天正十八庚寅年(一五六〇)小田原陣夜討の時、御本陣へ一番に蒐付、神妙の心掛有、御褒詞。遠州掛川に於いて知行二百石下さる。母知れず。

安東長次郎 早世断絶。

女子 深尾和泉守重良(岐阜太郎丸城主、後土佐一豊公筆頭家老)室

母北方(一豊公姉)

天正四丙子年(一五六六)濃州に於いて婚礼、寛永九年(一六三二)三月廿八日卒。

七十二、法名心法院王峰宗桂、佐川清源寺に葬る。

女子 乾彦作和信(一豊公長浜城主時代家老、長浜大地震で室と共に死亡)室

一豊公御養女とす。嫁年月知れず。天正十三乙酉(一五六五)十一月廿九日、江州長浜大地震で

潰死。四十二、濃州瑞龍寺有記云。

女子 広瀬總兵衛之為室

母北方

宿毛初代山内左衛門佐可氏

元龜二辛未年(一五七二)濃州北方に生る。母山内氏、始め幼年の時織田信忠公(信長嫡男)昵近し、

開田家系抜粹

政安

山岸彦五郎 三郎左衛門尉
号、開田越後守 徒五位下

方縣郡開田城主 或、作改田 千百貫。

永和四戊午年(一三七八)生。母ハ開田尾張守義政の女也。室ハ

福光左近藏人頼安女也。政安、実ハ當(当)國北山之

豪家長山遠江守源頼基之子、山岸加賀守滿頼

之子也。明徳年中、福光左近藏人頼安ハ山岸彦五郎

を迎へ天、我可聟養子と而、開田之家名及、所領

等、是二相傳(伝)春。其故ハ、彦五郎之実母ハ開田義政之

娘爾而、太郎之妹也。因而、政安ハ義政之外孫也。故尔、

福光頼安、信茂之志を以、我可実子有といへ共、是

を不用。山岸彦五郎を以、開田之家名及、所領共、

悉く改天政安二相傳春と、云々。依之、氏を改田二作ル

共、云々。因天、又、美濃國人、後之改田氏共、云々。福

光頼安ハ開田太郎某之死後、其子依無暫く

開田之所領を預り、今度、義政之娘并其子

山岸氏

興国元(一三四〇)年、脇屋義助は

兄新田義貞討死後、越前南朝

方主将として府中の戦に敗れ

美濃国根尾に落去。越前から

義助を慕い、五十餘人を率い

て根尾に来たのが、越前国江

沼郡山岸村出身の南朝方豪族

山岸新左衛門光章。根尾の長

嶺城を居城とした。

以来、五代日光範の時、谷汲の

府内に新城を築く。光範嗣子

なく、明智氏からの養子光貞

が継ぐ。孫光信の室は明智氏。

長山、長江らも山岸一族。なお、同時期に根尾に来た新

田氏の分家堀口氏は、根尾の宇津志城を居城とした。

彦五郎政安母子之者、被相讓ると、云々。猶爰、政安ハ福光頼安之贊養子となりて、成天、然而、開田之家督相續所令也。

南朝信濃宮之傳記二曰、後醍醐天皇第三之

皇子を妙法院宮尊澄親王と号。後、還俗有、

一品中務卿宗良親王と称。則、征夷大將軍被称。

信濃國二任世らる。因而、是を信濃之宮と称。又、上

野ノ宮と称共也。母ハ贈從一位藤原為子と云。是、權大納

言藤原為世卿之女也。又、一傳ニ此宮、其始、

遠江國井伊谷之館ニ依被住。或ハ、遠州之宮号共、云々。

北朝至徳二年乙丑（一三六五）八月十日、遠州井伊谷ニ而、

薨去也。壽七十三、云々。宗良親王之子を尹良

親王と称。遠州井伊谷之館ニ而誕生。母ハ九條閔白道

隆後胤、井伊遠江介藤原道政女也。北朝康暦

元年己未（一三七九）三月、吉野移、一品親王之

山岸氏（続）

大垣市上石津の多良城主も山岸氏一族。山岸信連・信周父子は、進士流を会得した供御方（将軍家の料理人）として足利將軍に仕える。

信周長男山岸美作守晴舎は、將軍義輝の供御方として義輝の側近。永禄八（一五六五）年五月十九日の『永禄の変』に連座し、嫡子輝舎、娘の義輝側室小侍從共に落命。

信周四男こそ、可児市明智城主九代明智光綱に養子した明

智光秀である。また、田中豊編『美濃国諸家系譜久貝氏系図』によれば、斎藤道三の母方の従弟久貝正好、

松波庄五郎（後の達三）を同道し山城国乙訓郡久貝村を立出、山

岸信連・信周を訪ねる、とある。

美濃での油売りを勧めたか。

宣下蒙畢。又、至徳三年丙寅（一三六六）八月八日、源姓被授、征夷大將軍兼右近衛大將、正一位中納言二任畢。

時二、應永四年丁丑（一三九七）九月頃、東國於故新田武藏少將源義宗之子、新田相模守義則入道行政

并二世良田藏人政義、同大炊助義秋、羽州安藝守

景庸、桃井伊豆守貞綱、同和泉守貞職、同右京

亮家綱、同大膳亮滿昌等、其外多年官方隨

身之人二相議し天、尹良親王を上野國新田郡

寺尾之城ニ招居、各守立之、所々之朝敵を誅し、

南朝之世を興さむと欲し、則桃井和泉守貞

職以、其旨を奏春。尹良、許容有、直二、吉野被出、伊

賀、伊勢經、同五年戊寅（一三九八）三月二、尾張國海部郡津嶋

之郷ニ到着せり。これにより、津島之豪家大橋修理

亮平貞允、岡本左近将監藤原高恒、恒川左

京大夫源信矩、山川民部少輔藤原朝祐、右四家

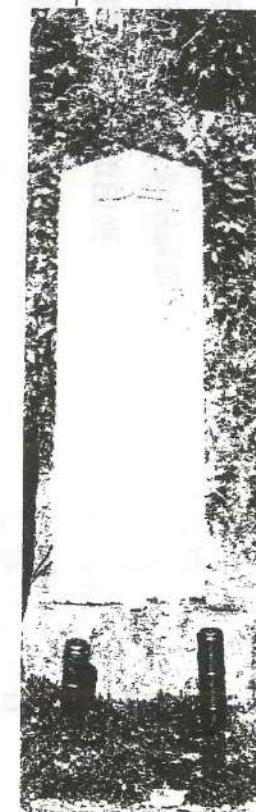
并、七名字、堀田尾張守紀正重、平野主水正清原

業忠、服部伊賀守平宗純、鈴木右京亮穂積

開田遠江守 始名、傳右衛門

武儀郡谷口村住人。

法名道開



法泉寺の境内
伝右衛門尉墓碑

母ハ石谷玄蕃助女。斎藤山城守秀龍入道
道三^ノ属、弘治二年丙辰(一五五六)四月廿日、方縣郡鷺山^ニ於^テ斎

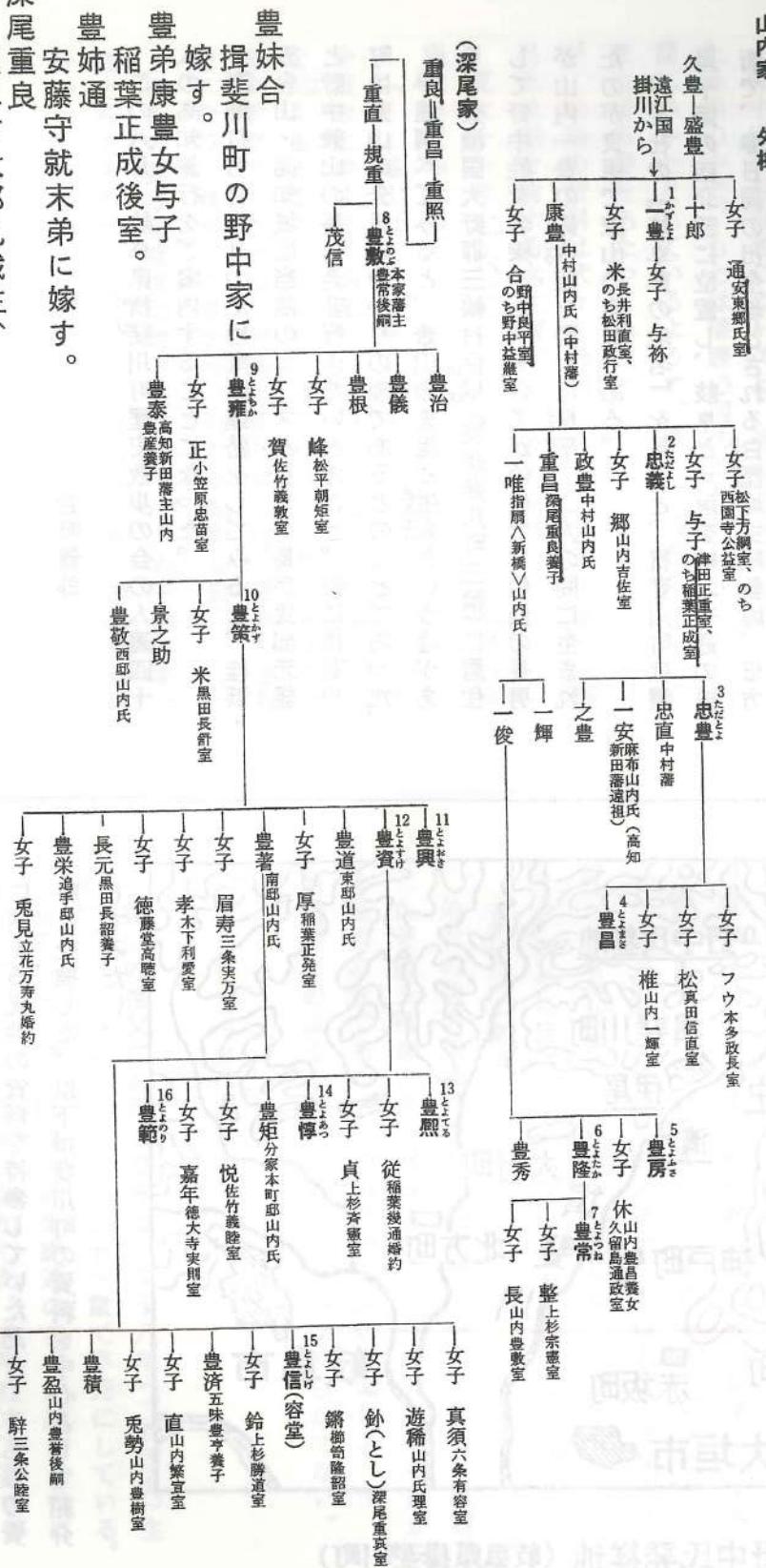
某

開田太郎作

母ハ明智頼^{アシタカ}女也。大力無雙^{アシタカ}、殊ニ水練達人。永禄
十二年己巳^(二十六)正月与^{スル}り、明智光秀^{につかえ}仕^{スル}一世之武功
莫太也。丹波國入^{スル}於^テ三千石^を領。天正十年壬午^(二十六)
六月十三日^の夜、山城國小栗栖^に於^テ主人と俱^{とも}ニ
自害。年三十六。

八
土佐藩祖山内一豊

〔藩主の系図〕（姻戚関係）



安藤守就末弟に嫁す
深尾重良

九 捩斐川町から土佐へ

野中兼山の先祖の地

岩崎義郎

この八月、岐阜県揖斐川町歴史散歩の会の人達四十人の高知旅行をご案内することになった。

詳細打ち合わせのため電話連絡をしてみると、桂浜・五台山・高知城は当然のコースとして、長宗我部元親と野中兼山の墓へ是非行きたいとのこと。特に揖斐川町は兼山の先祖のゆかりの地であるとのことであった。

早速調べてみると、兼山の先祖に道永という者があり、美濃国大野郡三輪村伊尾（現揖斐川町三輪）に居住して野中姓を名乗った。その子が伯仙で、伯仙の長男が山内一豊の妹合姫を娶った良平、二人の間に生まれたのが良明で兼山の実父である。

平凡社の『岐阜県の地名』を見ると、揖斐川町は濃尾平野の西北部に位置し、岐阜と大垣を結ぶ交通の要衝で、春日局の出生地とされる白瀧城主屋敷跡、母方の武将稻葉一鉄の墓所などもあり、野中と呼ばれた地区もあることが分かった。

それでは揖斐川町にも資料があるはずと、早速お願いしておいたところ、兼山の先祖・稻葉一鉄・春日局に関する現地の資料を持参していただき、こちらの資料と交換した。以下揖斐川町の資料を中心として紹介してみたい。



野中氏発祥地（岐阜県揖斐川町）

初代道永

野中氏の発祥地については、兼山の娘婉が作成した系図の中で、もとは播磨の国の武士で、浪人して美濃に移ったとしている。県立図書館の一、二、三の兼山関係書をあたってみたところこの説をとっているが、現地の資料は代々三輪村に住み、道永の頃には相当な資産を有する名主層であったとしている。

寛文十一年（一六七一）作成の『揖斐記』から峯山の項を見てみよう。

「……峯山は一名道永山ともいう。昔、伊尾町に野中道永と申す徳のある百姓あり。木曾屋村何某この山を扣え居るうち、野中方へ質物に差し入れ、何某請け出す手立てできかね、質物に流し候に付、道永引き取りになり、揖斐より芝を刈り取り支配申し候……」

道永の妻は斎藤某の娘。彼には十三人の子供があつたと伝えられているが、長男の伯仙と新太郎のほかは分かっていないという。

一一代伯仙

伯仙は永正十年（一五一二）生まれ。天正十三年（一五八五）七十三歳で没しているといわれ、彼の住んでいた清水の伯仙屋敷も、別図に位置が示されている。伯仙はこの地に住む剣術家の衣斐丹石に学び、免許の腕前であった。彼の妻は師丹石の娘で、四人の子があった。長男が兼山の祖父良平、次は女で、次男は益繼、三男が遂繼で、遂繼の子孫には、明治元年（一八六八）討幕に反対して切腹させられた野中太内がある。（墓は兼山墓地）。

伯仙の頃の美濃は激動の時代で、守護土岐氏を滅ぼした斎藤氏は織田氏に滅ぼされ、伯仙の死の三年前が本能寺の変である。この時代の美濃の要衝にあって、伯仙がどのように時世に対処したかは明らかでない。良平の成年期には美濃の豪族達の多くが織田信長に属して、その統一事業に参加した。良平は木下藤吉郎（秀吉）に属していたとき、山内一豊の妹合姫と結婚し

「田として仕え、一豊公が遠州掛川に封せられたとき、三千石を領して、家老の上席に位置した」（大原富枝『姫という女』）

一豊の甥として順調に出世した良明は、土佐入国後五千石となり、重臣の一人であった。しかし、慶長十一年（一六〇五）一豊が没すると、幡多郡中村で三万石を与えるとした一豊の約束は果たされないことになり、土佐を出奔、妻の縁を頼りに姫路に移った。あとを追ってきた妻のお石は尼崎で急死。後妻として迎えた秋田氏万との間に生まれたのが、のちの野中兼山である。

良明は元和四年（一六一八）京都で死亡。四十六歳であつた。

兼山の揖斐訪問

再び『揖斐記』を引用する。

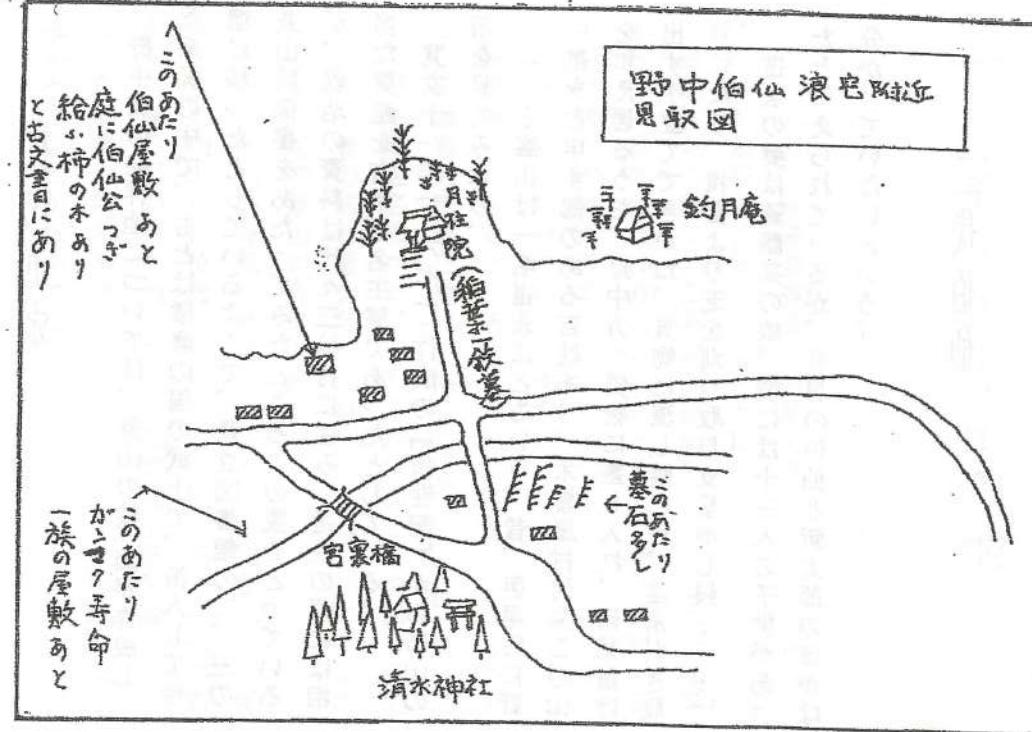
一土佐の國の城主松平土佐守殿ご家老に野中伯耆と申す人、美濃より先祖出候に付、先祖の墓を建てたき望にて当地へ参られ、野中苗字を訪ね、一類の名乗りいたし野中氏の先祖勘解由という人の石塔を、山に建て申され候。その銘に義明公の墓と致され候。

兼山の父良明の墓

と確認できるものは見当たらないという。揖斐川町の人たちは、本山についても関心があるようであった。余談ながら本山町と揖斐川町の交流といつたことも考えてみては、とふと思つた次第。

「この古墓長良村月桂樹は田舎にあります
古事記これあり
候由承り候」

兼山は承応元年（一六五二）夏、二代藩主忠義に従つて江戸に向かう途中、家来の伊藤勝兵衛・衣斐金佐衛門に先祖の地を調べさせ、ついで自分も同地を訪問した。このとき揖斐には一族野中七郎佐衛門が居て、先祖伝來の脇差を兼山に贈った。兼山はその刀を改めて七郎佐衛門に託したという。清水には伯仙屋敷と呼ばれる場所があつて、伯仙が手づから接いだと伝える柿の木があつたといふ。古老の話をもとに古寺の藪の中で荒れ果てた伯仙の墓を見つけ、伊藤・衣斐の二人に命じて遺骨を土佐に持ち帰らせ、帰国後本山に改葬したと伝えているが、本山帰全山の墓地には、伯仙の墓



四代良明

た（寛政重修諸家譜）とされているので、その後一豊に仕官したものであろう。長男良明が生まれた天正元年（一五七三）には、一豊は近江唐国で四百石を領し、ようやく秀吉の武将として認められた頃である。

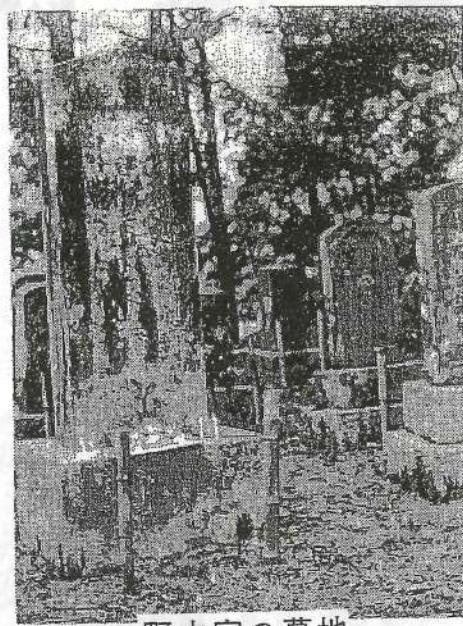
良平の死したのち、合姫は山内一豊の家臣となつていた良平の弟益継と再婚した。二人の間に生まれたのが、のちの兼山の養父直益である。

益継は永祿五年（一五六二）生まれ、合姫は天文二十二年（一五五三）生まれで、九歳の年上であるが、この再婚は一豊の強い意志を受けたものではなかろうか。

四代 良明

七歳で父を失つた良明は、母の再婚にしたがつて益継の家に移つたのである。この頃、天正五年（一五七七）から天正十二年（一五八四）九月に近江長浜に移るまでの間は、一豊は播磨有年を根拠地として、各地に転戦しているので、良明の少年期は播磨で過ごしたものと思われる。

「七歳で父権之進を失い、母と母方の伯父山内一豊公に愛されて育った。姓も山内を賜い、江州長浜以来



野中家の墓地

深げであった。

長宗我部元親の墓で、元親の妻と斎藤利三、春日局の関係、幼時春日局のお福が土佐に来たという話には、春日局の出生地というだけに、信じがたいといった表情も見られた。

春日局の出生地について、諸説も含めた資料を持参していただいたが、これらは稿をあらためて整理してみたい。

あとがき

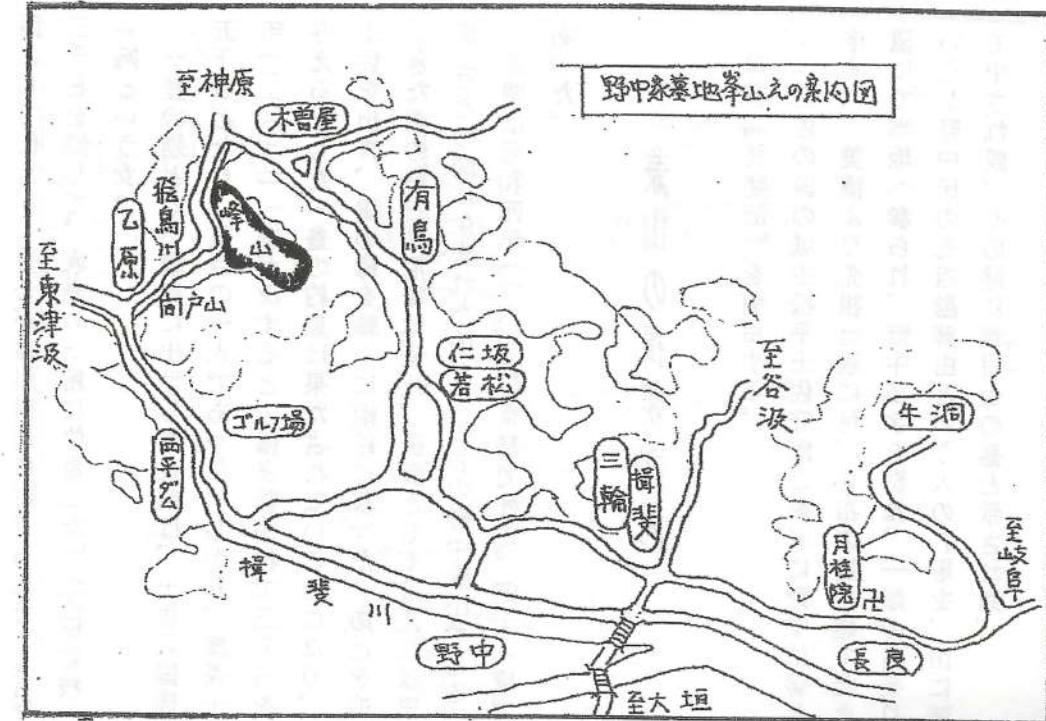
- ◆今夏の暑さと早魃は深刻だった。忘れていた早明浦ダムは一躍脚光を浴びたが、高知新聞に連載された「早明浦ダム物語」はその実態と多くの問題を提起して目を開かせてくれた。「都市にとって山村は『水がめ』程度でしかないのか」の言葉はむなし。
- ◆今日は原稿の出足が遅く心配したが、いつの間にか、いつものように揃つてくる。有り難いことです。小さいことでも記録に残しておきましょう。
- ◆本誌一年分を合冊して図書館(4)小学校(2)へ納めるのを三年間さぼっていました。このたび納めましたので、その目録を添付致します。(旧号余分があります。ご希望者はどうぞ、無料)
- ◆新入会員ご紹介致します。よろしくお願ひします。

中越歳男 高知市東秦泉寺四七九一二

（一三一〇九〇五）

(松本)

『秦史談』 第六二二号
平成六年九月二十九日発行
発行者 秦史談会
事務局 高知市東秦泉寺四七九一二
松本紀郎方
電話 0888-75-6671



の建立が混乱しているように思われる。兼山は先祖の地を確かめた上で、あらためて峯山に父良明の墓を建てたのではないか。

『皆山集』の記載では「明暦三年（一六五七）京都にあつた遺骨を土佐に持ち帰り、万治二年（一六五九）野中孝継に命じて道永山に改葬した」となっている。

峯山の野中家墓地では十九基の墓が確認されており、一番古いもので慶長十四年（一六〇九）から明治三十四年（一九〇二）まであるというので、兼山が野中一族の墓地を借りて父の墓を建てたものと思われる。

「野中良明公之墓」と刻まれた墓碑は一段大きく高さ一米余もあり、形・石質とも揖斐地方では見られないもので、兼山がわざわざ土佐から運んで来たものであろうと推定している。

幸心篤い兼山も、土佐に父の墓を建てることをばかうと先祖にゆかりのこの地を選んで、父の供養をしたものであろうか。

高知公園の野中兼山邸跡を見て、瀬戸内海の野中家墓地へ登り、伯仙の「男益縫以下兼山や鏡の墓、兼山に殉死した古墳次郎八の墓などを案内すると、一行は感慨

國史跡 黒井城跡

戦国動乱のかすかずの歴史を秘めながら
400年余りの風雪に耐え、
城跡は今、静かな陽の中にある



光秀公の五宿老(明)
あ京宗秀 智秀満、明智光忠、
る大俊満 斎藤利三、藤田伝
所学は 五、溝尾庄兵衛)本
以史揖実 能寺の変で前日に謀
。料斐は 反を打ち明けたと云
この編 左馬助桂桂に落去し、左馬助は山崎の合戦に敗れ討死。
纂町書の著者は、一族宮城家相伝系図書に宮城と
文所蔵に明智氏一揆宮城に改める。田中豊編『嫡子』
書の著者は、明智氏一揆宮城に改める。田中豊編『嫡子』
は、左馬助桂桂に落去し、左馬助は山崎の合戦に敗れ討死。
丹波平定後、秀満は福知山城の城代になり山崎の合戦後には湖水渡りをしたことで有名です。

卷之三

斎藤利三(としみつ)
は、光秀公の家臣の
中でも腹心として仕
えました

丹波平定において天正7年の黒井城（丹波市）の陥落後は、その城代として活躍しましたが山崎の合戦で敗れて討たれました。

その娘お福は春日局となり徳川幕府の三代将軍・家光の乳母として権勢をふるいました。

齊謙利三(號青霞)



黒井城本丸石垣

直正・光秀ゆかりの人々

●黒井城下で過ごした「春日局(お福)」と斎藤利三

NHK大河ドラマのヒロインになった春日局は、1579年(天正7)に黒井城下に生まれたとされる。父親である斎藤利三は、明智光秀の重臣として活躍した戦国武将である。光秀の丹波平定後、黒井城を与えられて城主となった。利三是山城のふもとにある下館(興禅寺)を陣屋として妻子を呼び寄せ、西丹波を統括した。この頃、幼名をお福といった春日局が誕生し、3歳までを黒井城下で過ごしたとされる。その後、徳川二代將軍・秀忠の嫡子・竹千代(後の家光)の乳母(養育係)に任命され、大奥の基礎を築いたのであった。

居館であった興禅寺には、お福が初湯に使ったと伝わる「産湯井戸」や、腰をかけて遊んだと伝わる「腰掛け石」といったゆかりの場所が残されている。

また、JR黒井駅前の広場には「お福の像」が建立されており、春日地域のシンボルとして市民に親しまれている。

© 2014 中川英明



© 2018 中川英明



興禅寺／お福の腰掛け石



こうぜんじ 興禅寺

黒井城跡の登山口にある興禅寺は黒井城下館跡で、平時、城主はふもとの館で政務を行った。水をたたえた七間濠、高石垣と白い練り堀を巡らせ、堅固な防御施設を備えている。丹波攻めの後光秀の重臣斎藤利三が城主となり、娘のお福(のちの春日局)がここで生まれ、3歳まで育ったとされる。



住所 / 丹波市春日町黒井 2263

【兵庫県丹波市観光協会提供】

むすびにかえて

古文書を紐解くとき、未知の記述に出会う感動が忘れられない。数学の教師が20数年にわたり続けて来られた所以がそこにある。そしてまた、歴史の真相に近づく魅力がそこにある。

10数年にわたり講師として当町を訪れ、親愛なる多くの方々との出会いがありました。わたしの誇りとするところであります。

ここに、この冊子を郷土史愛好家の方々に供する次第であります。伝えておきたいのです。故郷のすばらしいことを。

そして、故郷に誇りを、夢を、愛を。

令和3年1月

揖斐川歴史民俗資料館主催 古文書解読講座 講師 田中 豊